



クロニクル
世界の果ての年代記

—Prayer

夏目 陽

彼女らは、いつか朽ち果てるまで祈り続けるだろう

歴史の終わりの先をゆく少女と〈世界の終わり〉。歯車は回り、〈世界〉は動き続ける。絵の中に閉じ込められた風景。少女の中に響き続ける音響。〈世界の終わりの村〉の歴史と、少女の記憶が交差する瞬間、少女は〈世界〉に祈りを捧げ、〈世界の終わりの村〉には光が降り注ぐ……

丘に戻り、彼女らのひとりには家に戻った。家事を行うのだと彼女は説明した。もうひとりには私の廃墟探索に付き合うこととなった。ひとりで歩くのはさびしかったし、廃墟の案内も兼ねてくれると思ったからだ。実際、〈世界の終わりの村〉は広く、どこから見ればよいか迷っていた。だから、彼女の案内は重宝した。彼女は〈世界の終わりの村〉を丁寧に説明してくれた。私たちは一緒に歩きながら、廃墟村を歩き続ける。

彼女がまず初めに話したのは、〈世界の終わりの村〉の風化のことだった。

この村の風化は少し不思議だね、まず初めに色がなくなるの。色が失われ、白と黒と灰色のどれかしかなくなる。次にやつともものが砂になり始めるのね。これも不思議でどんなに黒いものでも、結果的には白か灰色の砂になる。砂はともさらさらしてて、肌触りがいいわ。

私は足元にあった砂を一握り触ってみた。彼女の言う通り、さらさらしていて気持ちがいい。海岸線にあるような砂だが、水分を含んでいないため、べたべたしていない。触っても手はあまり汚れていなかった。

それに注意したほうがいいのは、一見、ちゃんとなつている外壁でもすべて砂となつている場合があるわ。そうね、たとえば。

彼女は適当な外壁を選んで、それに石を投げた。普通の外壁ならば、そのまま跳ね返ってくるはずのだが、その外壁は石を飲み込むと、バランスを崩したかのようにすべて砂に帰ってしまった。まるで手品を見せられたかのように私は目を丸くした。

この廃墟も危ういところでその外見をどぞめているの。少しでもバランスが崩ればこの（世界の終わりの村）全体が一瞬にして砂に変わると思うわ。たぶん、この村のほとんどがもう砂になっているわ。

君たちには砂になった壁となっていない壁の見分けがつかうかな？ 私が見渡した限りでは全部同じに見えるけれど。

そうね。大体は見当がつくわ。だけど、旅人さんが見分けるのは難しいと思うわ。たぶん、だけど。

彼女はそう言いながら、瓦礫に腰掛けた。その瓦礫が砂でないことを彼女はどうかやら知っていたようだ。

私はあたりにある瓦礫を探し、その中で砂になっていないものを探そうとした。一つ目に見当をつけたものは、足で蹴ったところ砂になった。二つ目もそうだった。三度の正直と挑戦してみたものの、三度目もだめだった。彼女は私が失敗するたびにくすくすと笑い声をあげた。

その瓦礫なら大丈夫よ。

彼女は指を指してそれを私に教えた。私がそれを蹴ってみる。それは砂にはならず、その形を保っていた。私はその瓦礫に腰掛ける。彼女はまだ微笑みを浮かべていた。

砂漠を歩いて疲れたでしょう？ 少し休みましょう。歩き続けるのは体に悪いわ。

大丈夫だよ。これでも歩き続けることには慣れているつもりだ。ずっと旅をしてきたし、ここまでこの足で来たつもりだよ。

それじゃあ、あたしが疲れたわ。少し休みましょう。あたしのお願いよ。いいでしょう？ 旅人さん。

私は微笑みながら、頷く。彼女はじっと私のことを見ていた。私はその視線が気になりとても居心地が悪かった。私は適当な話を彼女とした。趣味の話、普段何をやっているか、好きなものは何か、思いついたものすべてを彼女に質問した。

そういえば、君は一体いつからここにいるんだい？

きつとあなたが思っているよりもずっと長い間、あたしたちはここにいますわ。長い間、この歴史を見続けているのよ。もしかすれば、あたしたちもそろそろ朽ちてしまいかもしれない。

具体的に教えて欲しい。君らは一体何年前に生まれたんだい？

彼女は私から視線を外し、どこか遠いところを見つめる。灰色の空は薄っすらと光を通すだけで、朝見た状態とやら変わっていなかった。

もう三百年以上も前になるわ。それに生まれたという言い方は正しくないわ。正確には作られたのよ。三百年前にあたしは自分自身の代わりとして、あたしを作ったの。(世界の終わり)に振子を巻き続けるためにね。

どうということだい？ それじゃあ、君が君を作ったってことになる。しかも、君は人間じゃないのかい？

君たちは一体、何者なんだい？

そうよ。旅人さんの認識であっているわ。あたしがあたしを作ったのよ。それにあたしは人間じゃないわ。あなたたちに言わせれば人形よ。〈世界の終わり〉に振子を巻き続けるという仕事をくり返すただけの人形なのよ。そして、最後の質問、あたしたちが何者であるかなんていうのは当の昔に忘れてしまったわ。人形はあなたたちの言い方だわ。あたしの言い方であたしが何と呼ぶのかは覚えていないの。ただ、きつと、〈世界の終わり〉に振子を巻き続けるために誰かが製作したのね。そこからは永遠の連鎖よ。自身自身が朽ち果てそうになったなら、自分と同じ人形を製作するの。そして〈世界の終わり〉に振子を巻く仕事をさせるわ。役目を終えたあたしはそのまま朽ち果てるのを待つよ。

君たちは本当に人形なのかな？ 悪い冗談を言つて、また私をだまそうとしてはいいのかな？

嘘をついているってことかしら？ まあ、旅人さんがそう思うのも仕方がないわ。だって、今まで誰もあたしたちが人間じゃないと疑った人はいないわ。人間にこのことを話すのは、旅人さんが初めてよ。

それは何か私に期待をしているということなのかな？ もしも、そうならばやめたほうがいい。私は君たちに何も与えることは出来ない。奪ってしまうばかりだ。

旅人さんはそう思っているかもしれない。でも、あたしたちは期待しているわ。姉はあんなことを言っただけれど、本当は心の底から期待しているの。だから、これはあたしからお願い。もう一度、この〈世界の終わりの村〉に緑を宿して。そして、小さな村を作つて。そんなに大きな村じゃなくていいわ。少し

ずつでいいの。長く活気のある村を作って欲しいの。あなたならきつと出来るわ。

無理だ。私にはそんな大それたことは出来ない。君たちが期待していることなんてひとつも出来ないんだ。

どうして？ あなたならきつとやってくれるわ。きつと失敗なんてしないわ。ここに新たな〈世界の終わりの村〉を作るのよ。素晴らしいことだと思わない？ 旅人さんもあの絵を見たでしょう。あんな情景がここにあればいいな、と思わない？

私はそれに頷く。彼女の口調はどんどん感情的なものになっていった。おおよそ、〈世界の終わりの村〉に来てから、初めて見る姿であった。それゆえに、彼女の言葉に虚偽りがなかったことがわかった。

私もそう思う。素晴らしいことだと思おうし、あの絵を見て、ここがああだったところに訪れてみたいとも思った。だけど、私には出来ない。私には出来ないんだ。君たちは自分たちでそういうことをやってみようとは思わないのかい？ あるいはここからどこかに行くというのは考えないのかい？

あたしたちは何か新しいものを作ることは出来ないわ。あたしたちの役割は〈世界の終わり〉に振子を巻き続けることよ。あたしたちはそれ以上のことを知らないわ。だから、人間のように何かを新しく生み出すことは出来ないのよ。絵なんて描けないし、音楽も創り出すことが出来ない。真似することは出来るかもしれないし、美しいとされるメロディーを推測できるかもしれない。だけど、あたしはそれを美しいと思えないのよ。発条仕掛けの音楽団は、果たして自分たちの音色を美しいと思っているかしら？

それでも、君たちは美しいというものを知っているじゃないか。現にあの活気あるころの〈世界の終わりの村〉を君たちは美しいと思っっている。そして、君たちは毎日、それを祈っている。あの言葉は嘘だったのかい？

嘘じゃないわ。だけど、〈世界の終わりの村〉が美しいといったのは現在との比較でしかないわ。今よりもほんの少しだけよい場所であっただけ。それにあたしたちは毎日、世界が美しくありますように、と願っているわ。だけど、それはとても漠然としたものなのよ。あたしたちは言葉の意味は知っているけれども、それがどんなことかは知らない。美しいことはよいことだから、あたしたちはよいことのために祈っている。あたしたちの認識はその程度なのよ。

そんなのは祈りじゃない。それはただの言葉遊びだ。言葉の意味だけを転がしているだけだ。祈りは言葉遊びでやるものじゃない。もっと、全身全霊を賭けてやるものだ。祈りは、自分が他のものにどうしようもならないほどの無力を感じていながらも、何かの力になりたいと思う、そんな思いだ。君たちがいも、そんな思いで祈っているのなら、それは祈りじゃない。ただの形だけの祈りだ。

心というもの、あたしというものがあたしたちにはないのよ。だって、振子を巻くための発条仕掛けの人形に、そんなものが必要だと思っくかしら？ 発条仕掛けの人形に感情は必要なく、仕事を淡々とこなすだけで充分だと思っくわない？

もしも、そうだとしても、君たちはどうなんだい？ 君たちは本当に感情というものを知らないのかい？

私はそうは思わないよ。君たちが〈世界の終わりの村〉について話すときはいつだって、感情を露にしているのに気づかないのかい？ 君はついさっきだって感情的になっていたじゃないか？ 君たちはもしかして、感情というものを知ってしまったんじゃないのかい？ たくさんの人と触れあってしまった。君たちが〈世界の終わりの村〉について話すのは、自分たちがただ、寂しいからじゃないのかな。私には君たちの祈る姿が言葉遊びには見えなかったし、君たちの言葉に嘘偽りがあるとも思えない。初めは、そうだったのだろう。誰も来ない間、君たちは淡々と仕事をしていた。二人で一緒に暮らして、それでも不自由はしなかった。君たち二人の世界は完結していた。それ以上を必要としていなかった。だけど、少しずつ君たちの居場所に人間が来るようになった。その人たちの話を聞くたびに君たちは少しずつ感情というものを知っていくようになる。そして、いつしか緑が宿り、小さな〈世界の終わりの村〉が出来るようになる。君たちは初めて、そこでたくさんの喜怒哀楽を知ったんじゃないのかい？ そしてそれを失った今、君たちは再び喜怒哀楽のない生活に戻りつつある。君たちは〈世界の終わりの村〉から人がいなくなつた後は、忘却と消失の十年だと言っただろう。それは君たちにも当てはまっているんじゃないかい？ 君たちはせつかく知ることの出来た感情をなくしそうで怖いんだ。だから、忘れないようにもう一度、ここに〈世界の終わりの村〉を作ろうとしているんだ。

彼女は何も答えず、俯いてしまう。私は彼女の口から答えが出るのを待った。灰色の雲からは依然として、光は差すことはなく、廢墟は薄暗さを保っている。失われた色。失われた匂い。失われた音。彼女ら

はそれらを新しく創造することは出来ない。ただ、〈世界の終わり〉にたたずんで、振子を回し続けるだけ。誰が彼女たちを創ったのかはわからない。だが、製作者は、彼女らがここまで苦悩する姿を考えたことがあっただろうか。

行きましょう。今日中に廃墟の中をすべて見ておきたいんですよ。まだまだ廃墟は続くわよ。と言っても、あとはほとんど似たり寄つたりのものばかりで、あまり面白くないかもしれないわ。

それでも構わない。出来ればもっと当時の生活がわかるような場所に行つて見たい。廃墟の中には入れないのかな？ 中に何かあるかもしれない。

廃墟の中に入るのは危険だわ。瓦礫の一部はまだ形をとどめているけれど、半壊している建物のほとんどはすでに砂よ。ちよつとでも衝撃を与えたら、あたしたちは砂に埋まつてしまうわよ。それに中のものも等しく砂になっているわ。それは金属非金属を問わないわ。ここは〈世界の終わりの村〉だから。たえ、金属であろうといつかは色を失い、真っ白な砂になるの。

私たちは廃墟を見てまわる。半壊した家の中を外から覗いてみたが、彼女の言うとおり、ほとんどが砂と化していた。私がうっかり壁に触れてしまうと、それは一瞬にして形をなくす。私たちは半日をかけて、それを見終えた。

彼女らの家に戻ると、ちよつと家にいた彼女は〈世界の終わり〉に行く準備をしていた。私と一緒に廃墟を回っていた少女はすぐに彼女の用意した荷物を持つと、〈世界の終わり〉に向かって歩き出した。

それじゃあ、あたしたちは振子を巻きに行ってくるわ。少しだけ家を空けるけれど、ゆっくりしていいわよ。

彼女らを見送った後、私は居間にある絵画をずっと鑑賞していた。ほとんど同じ作者が描いたらしく、絵の横には同じサインがあった。だが、少しだけ違う作者も混じっている。あの活気に満ちた〈世界の終りの村〉を描いた作者の作品も、数点見つけた。どれもが淡いタッチで描かれていて、まるで薄い水彩をキャンパスにゆっくりと垂らしてゆくような絵画だった。写実的な作品が多い中、そのような作品はひとときわ目についた。次に私はすべての客間を見て回る。すべての客間には絵画が飾られ、部屋は埃ひとつなく、シーツはきちつとしていた。彼女らの言ったことは嘘ではないらしい。彼女はいつくるかわからない旅人待ち続けているのだろうか。家具のひとつひとつに至るまでこだわりがあるようで、どれも部屋の雰囲気にあったものが置いてあった。

四部屋ほど見た後で、開いた部屋は客間ではなかった。窓がなく、部屋の中は真っ暗だった。明かりがないので、私は目が暗闇に慣れるまで待った。徐々に輪郭を現していくそれを見ながら、私は暗闇の中、立ちすくんでいた。

暗闇に目が慣れると、ここが倉庫であることに気づいた。だが、倉庫特有の埃っぽさがなく、よく手入れが行き届いていた。曖昧な輪郭のものを触りながら、これはカップだろうか、これはテーブルだろうかと推測してゆく。よく触ってみると、端が風化しているものもあった。彼女らが〈世界の終わりの村〉か

ら持ち出したものなのだろうか。確かに放置したままではすぐに風化してしまうだろう。私は一度、倉庫から出ると、居間からランプを持って、もう一度、倉庫の中に入った。

ランプの明かりで倉庫の全様はつきりとわかった。倉庫には家具から小物、本、食器、嗜好品まで当時の生活を感じさせるものがあつた。テーブルの装飾はカップの側面の装飾と似ていることから、これらが同じところで出来たであろうことがわかる。食器は真っ白なものがいくつあつた。ここの風土がそうさせるのか、あるいはすでに表面が風化してしまったのか、独特の白さであつた。私はその中にある手風琴を手を取つた。装飾こそ派手ではないものの、しっかりと作りこまれているようであつた。私は何個かの鍵盤を押してみる。調律もしてあるのか、音はとても正確だつた。私は手慰み程度の曲を弾いてみる。昔、どこかの町で覚えた曲だつた。曲名すらも忘れてしまつたが、メロディーだけは覚えていた。鍵盤に左手を添えると、自然と指が動いた。

旅人さん？

私が手風琴を弾くことに夢中になつて、彼女らが帰つてきたことに気づかなかつた。私は手風琴を元の場所に返すと、勝手に倉庫に入ったことを詫びた。彼女らは首を横に振る。

いいのよ。この家の中ならどこに入つても構わないわ。それよりも、旅人さん。あなたは手風琴が弾けるの？ さつき弾いていた曲はなんて言うの？

曲名はもう忘れてしまつたよ。昔に訪ねた村で教えてもらったことだけは覚えている。手風琴と一緒に

もらったんだ。旅の途中でそれは売ってしまったけれどね。

どうして売ってしまったの。そんなに綺麗な音が出るのに、素敵な曲が弾けるのに。きっとそれを演奏するだけで道端の人々はあなたにお金をくれるわ。

私はそんなに上手い弾き手じゃない。それに曲もこれしか知らないんだ。道端で弾いたとしても誰もお金をくれないよ。実際、やってみただけで、誰もくれないから、手風琴を売ってしまったんだ。

もったいないわ。ねえ、あたしたちにもあなたの弾く姿を初めから見せてくれないかしら？ あなたの弾く姿をしつかりとあたしたちは見てみたいの。

こんなことでよければ。

私は手風琴を持つと、倉庫を出る。彼女らはふたりとも微笑んでいる。彼女らは感謝の言葉を述べる。

私は肩にかけて手風琴の重さを確かめながら、指の動きを思い出そうとした。ところどころ曖昧なところがあつたが、指が自然と動いてくれるだろうと思つた。

居間に着くと、彼女らは安楽椅子に腰掛けた。私は彼女らの前に立ち、何個かの音を出す。覚えているメロディーを何回かくり返した後、私は手風琴から手を放す。

ちよつと自信のないところもあるし、久しぶりだから、間違ふかもしれない。それに人前で弾くのはちよつとだけ緊張するんだ。だから、音を間違ふたりするかもしれないけれど、それでもいいかな。

彼女らは頷いた。私はそれを見届けると、手風琴に再び手をかける。彼女らも黙っていた。私は深呼吸

をひとつずつすすると、鍵盤を叩き始める。

メロディーは昔、聴いたものとなんら遜色がなかった。その音を聴きながら、新たな音を生み出し続ける。手風琴からは音が噴き出し、石造りの家の中を反響する。曖昧なところは自然と指がその先の音を教えてくれた。私はそれを頼りに弾けばよかった。音はいつの間にか唸りとなり、私と彼女らをどこかへと連れて行く。最後のほうは無我夢中だった。いつの間にか私の指は止まり、演奏も終わっていた。

とてもよい演奏だったわ。とても素敵よ。

彼女らは拍手を贈る。私はお辞儀をした後、手風琴をテーブルに置いて、安楽椅子に座った。

ねえ、もう一曲弾けないかしら？

あいにく私はこれしか覚えてないんだ。もう一度、同じになるけれどそれもいいのか。

いいえ、あなたが即興で作った音楽が聴きたいの。

即興で？ だけど、それじゃあ、さっきよりもよい曲であるとは思えない。あれは村の人が何年もかけて作った素晴らしいものだ。それに比べて、私の作る即興の曲なんてつまらないものだよ。

いいえ、あたしたちはあなたが音楽を創造する瞬間に立ち会いたい。それに大丈夫。あなたならきっと素晴らしい曲を弾くことが出来るわ。

私は安楽椅子に座りながら、膝に手風琴を置く。座った体勢のまま、何度か意味のないメロディーをくり返した。即興で曲を作ったことなんて一度もなかった。私自身がそんなこと出来るわけないと思ってい

た。私は指が自然と次の音を教えてくれるまで、断片的で意味のないメロディーを弾き続ける。何十回とそれ続けていると、自然と指先が動くようになった。

ひとつの断片的なメロディーから、突如、指は動き出す。私は特別意識をしなくても次はこの音と指が教えてくれる。私はちよつとだけ鍵盤のキーを叩けばいいだけなのだ。断片的なメロディーはいつしか一分、二分と続き、曲となる。一度も弾いたことのないメロディーラインは美しかった。きつとこんな美しい曲は二度と弾けないだろうと壁に跳ね返った音を聞きながら、思った。無意識の産物だった。やがて、ラストに入るのか、演奏にも指先にも力が入る。今までの断片的なメロディーを繰り返し、繰り返し、螺旋階段を昇るように終わりに向かって昇華されてゆく。

一番初めに弾いた断片的なメロディーを弾き終わると、指は動かなくなった。それでも音は部屋に反響し、少しの間、残っていた。私たちは小さなそれに耳をすます。すべての音が消え去った後、彼女らは口を開いた。

素晴らしかったわ。素敵な音楽だったわ。

ありがとう。自分で弾いていても、もう二度と弾けないかもしれないと思うほどよかったと思ってる。そう君たちにも言ってもらえると、嬉しい。

ねえ、ひとつだけ訊いていい？ 旅人さんは何かを創っているとき、どんな気分なのかしら？

そうだね。新たなものを創るといふ希望が少しと、不安がいっぱいかな。もちろん、新しいものを創る

のは楽しいし、素敵なことだと思ってる。だけど、それにはいつも不安と一緒に来るんだ。本当にこれでよいのだろうか？ 選択を間違っていないだろうか？ 何か新しいものを創るというのは手探りの作業なんだ。初めから道が開けているものなんてない。いつだってそんな作業には不安がついて回る。だけど、その中で何かを掴み、そして磨いて輝いたときの感動は決して忘れられない。

あたしたちにもそんなことがわかる日がいつか来るかしら？

きつと。君たちならすぐ来ると思う。初めは失敗するかも知れないけれど、いつかきつと何かを創り出せると思う。だって君たちには感情がもうあるじゃないか。どんなものが美しいかもわかっているじゃないか。

彼女らは薄く笑った。私もそれに釣られて、笑みを浮かべる。私たちは彼女の出してきた紅茶を飲みながら、他愛もない話を日が沈む時間までくり返した。

彼女らが三度目の振子を巻きに行く時間になると、私は眠ることにした。明日からはまた延々と歩き続ける毎日が始まるのだ。少しでも体力を温存しておきたかった。

ベッドはきちんと整えてあった。私はそれにもぐりこみ、このベッドとも当分お別れかと思った。目を瞑るとすぐに眠気はやってきた。久々に手風琴を弾いたせいなのか、半日の間、ずっと歩きっぱなしだったせいなのか、あるいはその両方なのか。私はすぐにまどろみの中へ落ちていった。

冷たく静かな空気を吸いながら、私は起き上がった。昨日よりもやや、明るい気がした、カーテンを開け、外の景色を見る。凜とした空気が部屋の中に入ってきた。〈世界の終わりの村〉は薄っすらと明かりに包まれている。空を見上げると、灰色の雲はいつもよりも薄く、太陽の光が少しだけ降り注いでいた。

私は部屋を出て、居間を目指す。彼女らはもう起きているのだろうか。私はちらりと懐中時計を見た。昨日と同じ時間に起きようだった。昨日はすでに彼女たちが起きていたから、もしかすればもう〈世界の終わり〉に向かったのかもしれない。

だが、居間に彼女らはいた。二つの安楽椅子に深く腰掛け、目をしっかりと瞑っていた。いつも着ている機械油に汚れた灰色のワンピースは肘掛に綺麗にたたんで置かれてあり、彼女らは服を身に着けていなかった。その真っ白の肌はとても綺麗だったが、ところどころにひびが入り、胸のところは大きく穴が開いており、中の肋骨とゆっくりと動いている歯車が見えた。それは普段、ワンピースで隠れてしまうところだった。まるで朽ち果てるように彼女らの全身にはひびが走り、その下には剥がれ落ちた皮膚があった。私は彼女らの身体を触ってみる。ひびに沿って指を滑らせてみると、さらさらとした砂が指に付着した。私はさらに穴の開いた胸を覗く。肋骨は真っ白でつるつるしていた。私はそれに触れながら、さらに手を彼女の身体の中へと入れてみる。人間で言えば心臓のある場所に歯車は密集していた。私はその外形を壊

してしまわないように指先でなぞる。彼女らの心臓は、私たちのものと同じようにちゃんと回転していた。内側から皮膚の裏をなぞり、その細かな凹みや突起を指先に感じてゆく。穴の周囲に私の腕があたると、そこからぼろぼろと皮膚が剥がれ落ちた。私は肘まで彼女の中に入れると、彼女らが本当に人形であるのかを確かめた。私は指先でそれを探るのをやめ、穴に顔を近づけた。私は穴から彼女の中を覗く。うっすらと明るい彼女らの中を見ると、やはり指先が触れたようにいくつもの歯車が動いており、足や腕に向かつて何本かの糸が伸びていた。彼女らは隣に座るもう一人の自分を見るように顔を向けていた。顔の向き以外、瓜二つの彼女ら。真っ黒な長髪も、ぷつくらとして唇も、ほのかに色づいた灰色の乳頭も、小さな膝小僧も、丁寧に切りそろえられた足先の爪も、彼女らを人形と思えば思うほど、それとは遠い存在ではないかと思う。

彼女らはそつと目を開けた。灰色の瞳を開きながら、焦点はすぐに私に会う。首を少し傾げた後、彼女らは同時に口を開いた。

あら、旅人さん、起きていたの。ごめんなさい。紅茶の準備をしていないわね。

いいんだ。私が勝手に早く起きたんだから。まだ君たちが眠かったら、もう一度眠ってもいい。

いいえ。もう目が覚めたわ。今、紅茶を入れるから、椅子に腰掛けてゆっくり待っていて。

彼女らは肘掛に置いてあった灰色のワンピースを着ると、奥の部屋に入ってしまった。私は彼女らの言葉に甘え、安楽椅子に座り、紅茶が出来るのを待った。彼女らはすぐ紅茶を持って、居間に戻ってきた。私

は皆が安楽椅子に座るのを見てから、紅茶に口をつけた。

旅人さんは今日、行ってしまふのかしら？

そうだね。食料もあと帰る分しか残っていないし、見たいものは全部見ることが出来たし、これを飲んだ後にここを出ようと思う。それよりもひとつ気になることがあるんだ。いいかな？

いいわ。どうしたの？

君たちの身体に無数のひびが入っていた。それに大きな穴も開いていた。それはもしかして、〈世界の終りの村〉が砂となったように、君たちもすでに砂となり始めているということなのかな。

彼女は少し間を置いた後に頷いた。その表情は諦観に近いものだった。悲しみも喜びもなく、また楽しみもなく怒りもない。私は紅茶で口を湿らせた後、言葉を続ける。

君たちは、あとどれぐらいで朽ち果ててしまふのかな？

そうね。長く持つて一年というところかしら。風化の進行度はまちまちだから、上手くいけばの話だけれどね。だけど、明日いきなり砂になってしまうということは、ないと思うわ。風化はゆっくりと進むのよ。いつの間にか、指先が動かなくなり、足がなくなり、ついには胴体が少しずつなくなっていくの。あたしたちを作ったあたしたちはそうやって朽ち果てていったわ。

君たちはそうやって朽ち果てていくことが怖くないのかい？

怖い、のかもしいわ。だけど、あたしたちを作ったあたしたちはとても満ち足りた顔で朽ちていっ

たわ。きっと、使命を全うした気持ちがあったんでしょね。だから、怖くてもそれを拒むことはしないの。三百年繰り返したことが今、終わるのかと思うと、ちよつとだけ嬉しかったりもする。ねえ、〈世界の終わりの村〉がどうして風化して、そしてどうしてこの家や、家の中身が風化しないかわかるかしら？
私は首を横に振る。

〈世界の終わり〉が風化させるのは、人の思いが詰まったものなのよ。この家やこの家の中身はすべて、人の思いをあたしたちが取り出して、あたしたちの中にしまったの。だから、風化しない。〈世界の終わりの村〉のものは彼らの思いが詰まっていたから、今ではああやって風化してしまったのよ。あたしたちは人形として作られたため、器としても働くことができたの。からっぽの器よ。器がからっぽならあたしたちは永遠に朽ち果てず、生きて〈世界の終わり〉に振子を回し続けることが出来るのよ。きっと、あたしたちの製作者は〈世界の終わり〉が思いの詰まったものを風化させていくというのを知っていたのね。だから、からっぽの器なら、振子を巻き続けることが出来るだろう、と。だけど、からっぽの器はからっぽであったがゆえに、思いを注ぐことが出来た。きっとあたしたちの身体にひびが入り始めたのは、思いが器から溢れてしまったからだと思うわ。

君たちはこれからどうするんだい？

あたしたちは新たなからっぽのあたしたちを作るわよ。そうして〈世界の終わり〉に振子を巻き続けるのよ。今までのあたしたちがしてきたことと何ら変わりはないわ。

〈世界の終わり〉のことじゃない。君たちのことだ。君たちは再びからっぽの自分を作った後、どうするんだ？ そのまま朽ち果てるのか？ 君たちは〈世界の終わり〉から出てみようとは思わないのか？

それは旅人の考えよ、旅人さん。あたしたちはここで朽ち果てるの。それ以外の場所で朽ち果てようとは思わないわ。きつとあたしたちはこの〈世界の終わりの村〉と一緒に朽ち果てると思うわ。

それで、本当に、いいと思ってるのかな？

彼女らは頷いた。その肯定には迷いがなかった。きつと何十年、あるいは何百年と長い年月をかけて、出した答えなのかも知れない。私がそれに意見することは出来なかった。何を言っても私は彼女らを不幸にしていまいそうだったからだ。

彼女らはカップを片付けるために立ち上がる。私はため息にも似た深呼吸をした後、安楽椅子に深くもたれかかった。彼女らはカップを片付け、居間に戻ってくる。

旅人さん。ちょっとだけあたしたちの話に付き合ってくれるかしら？

彼女らは真剣な表情で私を見た。私はそれに頷いて応える。彼女は感謝の言葉を言うと、奥の部屋に入っていた。私が唯一、見ていない部屋であった。彼女らはその部屋から三枚の絵を持ってきた。一つはここに初めて来たときに見た〈世界の終わりの村〉の絵である。二枚目は風景画ではなかった。一枚目と同じ筆遣いで描かれた瓜二つの少女だった。その絵の中では少女は満面の笑みを浮かべている。ひとりは画面の中心に、もうひとりはそれに寄りかかるように腕を掴みながら、立っている。淡いタッチとそれが

重なり光が彼女らをいつそう際立たせていた。三枚目は風景画だった。真っ白な砂漠と薄っすらと霧の晴れた向こうに、巨大な歯車が広がっている。それはまさに昨日見た〈世界の終わり〉の光景であった。彼女らはその三枚をテーブルに置くと、安楽椅子に再び腰掛ける。ゆつくりともたれかかり、椅子を何回か揺らしたのち、彼女らは話し始めた。

今から話すのは、この〈世界の終わりの村〉の歴史と呼ぶにはあまりにも小さすぎるものよ。言うなれば、あたしたちの話よ。あなたには話しておこうと思うの。今まであたしたちを見分けることの出来た人間の話を。あなたにはそれが今まで二人しかいなかったとしか話していなかったわね。まずはその二人の紹介からするべきかしら。ひとり目はこの絵の作者よ。名前はもう忘れてしまったし、彼は名前で呼ぶよりも絵描きさんと呼んだほうがしっくりとしていたわ。ちようど、あたしたちがあなたを旅人さんと呼ぶようにね。もうひとりは何れも双子のひとり、〈世界の終わりの村〉を衰退に導いた若代表よ。彼も名前があったわ。だけど、〈世界の終わりの村〉の人々は彼の名前を言うことを忌み嫌ったわ。彼の名前には呪われた家系が含まれていたからよ。誰もが彼を若代表と呼んでいたから、誰もが彼の名前を覚えていなかったのよ。さて、そうね。どちらの話から始めようかしら。ここはやっぱ時間の流れ通り話すのが一番わかりやすいかしら。そう、ちようど〈世界の終わりの村〉に人が頻繁に出入りするようになった二十年目ぐらいのことだったかしら。〈世界の終わりの村〉に一人の絵描きが来たわ。歳はそのころちようど、二十歳ぐらいだったかしら。とにかく旅人にしてはかなり若い人だったわ。そのころになると、あたしたち

も日常的に村を歩くようになったわ。それ以前までは家から出るのは、〈世界の終わり〉に振子を巻くときだけだったわ。その日もあたしたちは〈世界の終わりの村〉をぶらぶらと歩きながら、話しかけたり、話しかけられたり、子供と一緒に遊んでみたりもしていたわ。

彼を初めて見たとき、彼の身なりはとても貧相だったわ。〈世界の終わりの村〉はとても寒いところよ。でも、彼は薄着をして、震えていたわ。唇が紫色になっていて、顔色もよくない。ふらふらとした足取りで、今にも倒れてしまいそうだったわ。あたしたちはそんな彼を不憫に思つて、声をかけたわ。大丈夫？つて。彼は二、三度頷いたけれど、あたしたちは心配だったから、あたしたちの家に招いたわ。あたしたちは彼が休んでいる間に荷物の中を見ただけだけど、案の定、食料や衣服なんて入ってなくて、あつたのは、二つの真つ白なキャンバスと絵の具だけだったわ。〈世界の終わりの村〉が出来てから、あたしたちはめつきり家に人を泊めなくなつたわ。あたしたちは旅人をただで泊めていたけれど、それじゃあ〈世界の終わりの村〉の宿屋が儲からないでしょう。だから、あたしたちはお金に困っている旅人さんしか泊めないことにしたわ。まさしく彼がそうだったの。彼もまた、まあ、あたしたちの家に泊まる旅人はほとんど同じことを聞くのだけれど、本当にただでいいのか？ と訊いたわ。あたしたちは頷いたけれど、彼は納得してくれなかつたわ。彼はとても頑固者だったわ。あたしたちが何を言つても納得してくれなかつたの。仕方がないから、あたしたちは彼にこう提案したわ。あなたが絵描きなら、何か一枚、絵を描いてちょうだい。それならただで泊まってもよいと。彼はしぶしぶながらも提案を受け入れたわ。その日の夜は旅

人さん、あなたと同じで、この村の繁栄の歴史を話したわ。彼はとても興味を持ってくれた。村の歴史なんか聞いても普通の旅人さんはすぐに飽きてしまうわ。だけど、彼は飽きずに最後まで聞いてくれた。それに加え、自分が今まで訪れた国や村のことを話してくれたわ。彼が語った国や村はどれもへんで、どこか歪んでいるんだけど、よく現実を映していて、寓話としても楽しめたわ。もしかしたらあの話は彼の作り話だったかもしれない。本当はあんな国や村はなかったのかもしれない。だけど、それは些細な問題よ。考えるだけせっかくの魅力が興ざめしてしまうというものだわ。ねえ、旅人さん。どうしてあなたはあたしたちに今まで訪れた国や村の話をしてくれないの？

して欲しかったのかい？ しなかったのには、別に他意があったわけじゃないよ。君たちが求めたら、私は今まで訪れた国や村の話をしていたかもしれない。だけど、今はしない。今は君たちが素敵な話しているからだ。せっかくの素敵な話の腰を折るような真似はしたくない。さあ、続けて。

そうね、わかったわ。絵描きさんは僅かなお金を持っていたの。今までそのお金でキャンバスを買って、絵の具を買って、絵を描いてそれを売って旅をしていたらしいわ。でも、いつも、元を取れるとは限らないじゃない？ 絵描きさんの場合、ほとんどが上手くいかなかったらしいわ。だけど、たまに高く売れたときもあったらしいわね。あたしは彼に訊いたわ。どうしてその国に留まろうとしなかったのか？ 少なくともその国には彼の絵を高く買ってくれる人がいるはずなのに。そんなあたしの疑問に彼はあっさりとした顔をしながら、つまらないじゃないかと答えたわ。ひとつの国に留まり、絵を描き続けるよりも、ど

ことなく旅をして、ついた先の美しい風景を目に焼き付けることが出来るのならば、どんなに過酷であろうとも、それをあえて行おうと。

彼は、次の日には絵を描き出したわ。丘の上から一望できる〈世界の終わりの村〉を彼は三日かけて描きあげたわ。あたしは彼の作業を後ろから見ていたけれど、彼の画風は今まで〈世界の終わりの村〉にいた絵描きさんの誰とも似てなかったの。彼は目で見たものをそのままキャンパスに描こうとはしなかった。彼の絵は精密とはとても言いがたかったし、ほとんど線がぼやけていたわ。まるで濃い霧の中の村を描いているかのようなだった。でも、とても素敵だったの。〈世界の終わりの村〉が太陽の光に包まれ、淡く輝いているかのようなだったわ。でも、彼の絵は売れなかったわ。出来た絵をさつそく、あたしの知り合いに見せたわ。だけど、彼らは皆、絵描きさんの画風を受け入れなかった。仕方ないわ。〈世界の終わりの村〉の人々からすれば、絵とは精密な模写でなければいけないという先入観があったからよ。いくつかの人々は彼の絵を買い取ってくれると言ったけれども、その値段は元を取れるようなものではなかったわ。だから、あたしが買ったの。元の二倍の値段でね。元々、お金は有り余っていたし、誰かのために使えるというならば、あたしは惜しみなく使うつもりだったわ。でも、その値段を見て、絵描きさんは首を振ったわ。自分の絵はそんなに評価されるものじゃないと。彼の提示した価格はキャンパス代よりもほんの少しだけ高い値段だったわ。あたしは何度も彼にそれでよいの？ と訊いたけれど、彼は自分の答えを変えることはなかったわ。彼は、元々持っていたお金とほんのささやかな差額でキャンパスを二つと足りない絵の具を

買ったわ。彼の絵の具入れの中にはたくさん色があつたわ。その地域以外、見つからない絵の具もあつたらしいわ。この《世界の終わりの村》でも彼は肌色と灰色を買つたわ。灰色の絵の具があるなんて珍しいと彼はあたしに言つたわ。それはあの砂漠で取れた砂で作つたものだったの。あたしがそう言うと、彼はぜひ大切に使いたいと言つたわ。

あたしは《世界の終わりの村》の絵だけでも充分だったわ。だから、元々宿代なんてもらう気はなかつた。だけど、彼は納得してくれなかつたわ。お金を払つて買つてくれたんだから、それとこれは別だ。幸いキャンバスは三つもある。幸い描きたいものもある。あたしはそれは何？ と尋ねたの。彼は君たちと答えたわ。さつそく明日から描き出したいと。あたしはあたし自身をそれまで意識して見たことがなかつたわ。もちろん、あたしは隣にいるあたしを見ればあたしを見ていることと同じことなんだけれど。だけど、自分自身の容姿を見たことがなかつたから、それが本当なのかあたしにはわからなかつたわ。今まであたしに出会つた人々はすべてあたしたちを見分けることは出来なかつた。彼もまたあたしたちを見分けることが出来るとは思えなかつた。一応、意味をなさないと思ひながらも、あたしが姉で、隣にいるあたしが妹と紹介だけはしていたけれど。

いざ、絵を描く段階になると、あたしは初めての体験でとても緊張したわ。あたしの家の前で描くことにしたんだけど、いくら絵描きさんが笑つてと言つても、上手く笑うことが出来なかつたの。普段は普通に笑うことが出来たのよ。でも、絵描きさんの前で上手く笑うことは出来なかつたわ。それは隣にい

たあたしも一緒のようで、二人で変な笑みを浮かべながら直立不動で家の前に立っていたわ。そんな姿に絵描きさんも呆れたんでしようね。少し経ったら一度、休憩しようと言ったわ。ちらりと彼のキャンバスを見たけれど描き込まれていたのは主に背景で、あたしたちのいた場所はぼつかりと真つ白だったわ。絵描きさんはキャンバスと画材道具を片付けて、丘から〈世界の終わりの村〉を眺めていたわ。あたしたちは彼の後ろに立って、あの建物が何かを教えていったわ。彼は振り向いて、あたしに言ったわ。君たちはこの〈世界の終わりの村〉の話をしているときが一番、楽しそうだと。そのときはあまりそんなことは意識したこともなかったけれど、今思うときと絵描きさんの指摘は正しかったんだわ。あのころは何よりも〈世界の終わりの村〉を見続けていくことに楽しみを感じていたの。

結局、彼はその日、それ以上あたしの目の前で描こうとはしなかったわ。だけど、彼は部屋に閉じこもってその絵を描き出したの。さつき、あたしは彼は目で見たものをそのまま描こうとはしていなかったと言ったでしょう。つまりそれなのよ。彼は一度、絵を描くとき、いつまでも美しい景色を見続けることはできないと言ったことがあったわ。美しい景色とは常に一瞬である。それをここにあるような描き方で描くことはほとんど不可能だと。だから、その一瞬を心で見つて、それを描くんだと。彼は結局、それから一度もあたしをモデルにしながらかくことはなかったわ。いつも部屋でひとり、静かに描いていたわ。あたしには完成まで見せたくなかったのね。部屋を掃除するときにはいつも絵がなくなっていたわ。彼が再びあたしに絵を見せてくれたのは、描き始めてから一週間とちよつとが過ぎたころだったわ。

絵はすでに完成していたわ。あたしの家の目の前で一緒に立っているあたしもうひとりのあたし。自分たちでも驚くほど笑顔を浮かべていたわ。あたしはこんな瞬間が一度でもあったらと思うたけれど、思い出すことができなかった。もしかしたら、反射的に行動したのかもしれない。だけど、彼はその一瞬を逃していなかったのよ。淡い光に照らされたあたしにあたしは思わず見入ってしまったわ。すると、さらに驚くことを発見したのよ。画面の中央に立っているあたしと、寄りかかっているあたしが描き分けられているじゃない。まるでどちらが姉でどちらが妹かを知っているようだ。あたしは思い、試しに彼に訊いてみたのよ。絵描きさん、あなたはあたしのどちらが姉でどちらが妹かわかるのかしら？ と。すると、彼は頷いて、あたしを姉と言いつ、隣にいたあたしを妹だと言ったわ。驚いたことにそれは当たっていたのよ。あたしは彼にどちらが姉で、どちらが妹かわかるの？ と尋ねたわ。今まで、あたしたちを見分けることが出来た人はいないわ。だから、あたしたちはお互いは同一であるということを信じて疑わなかったわ。旅人さん、あなたに想像できるかしら、何百年の間、自分とまったく同じ特徴を持ったものと暮らし続ける生活を。あたしたちは彼に言われて、今、目の前にいるもうひとりの自分が自分ではないことを理解したわ。だけど、何百年の間、同一だと信じてきたものが、実はまったく違っていたなんてことが納得できるかしら？ 論理的に理解したとしても、感情的に納得できないのよ。結局、あたしはこう結論付けたわ。あたしたちは同一であるけれど、彼から見れば同一ではない。それが一番、納得できる答えだったわ。

彼は結局、〈世界の終わりの村〉で五枚の絵を描いたわ。そのうち、二つはあたしが持ち、残りの三つは元が取れるぎりぎりの値段で村の人が買ったわ。彼は一ヶ月ほどこの村に滞在した後、今度は南の〈世界の終わり〉を目指すと言い、村を出て行ったわ。まず、絵描きの話はこれで一区切りよ。旅人さん、あなたは彼をどう思った？

とてもよい人だと思う。信念を持って行動している人だ。絵を描くことには詳しくないけれど、絵を見て、話を聞く限り、技術も、知識も持っているみたいだ。彼は重要なことを知っているよ。我々はあまりにも視覚に頼りすぎていて、本当に知るべきものを知っていない。本来ならば、私たちは五感のすべてを使ってそれを知るべきなんだ。私の訪れたことのある国に生まれつき盲目の女性がいた。私は彼女の半生を本人から聞いたけれども、盲目で困ったことがあるのはほんのささいなことだけだったらしい。彼女はそれ以外の感覚で目の前にあるものがどういふものなのか、今、どういふ状況なのかの把握していた。どうしてそんなにことが出来るのか。彼女はこう言ったんだ。私たちは元々、五感すべてを使って目の前のものを把握していた。それがいつの間にか、視覚ばかりに頼るようになってしまった。だから、私たちは視覚がなくなれば、大抵の情報を把握出来なくなってしまう。だけど、それは違う。本来、五感すべてを使ってものを把握しているものにとって見れば、ひとつの感覚が失われたところで、他の感覚がそれを補完するようになるんだ。実際、彼女は私の身長や体重を当てて見せし、どのような風貌か、彼女はまるで見えているかのように話した。それから私も五感で物事を理解しようとしている。その絵描きは絵

描きであつたがゆえに、五感すべてで感じるといふことを無意識に理解していたのかもしれない。

確かにそうかもしれない。彼はあたしたちが瓜二つであるということにあまり捕らわれていなかったために、見分けるのが出来たのかもしれない。だけど、あたしはそうだとは思わないのよ。今まで、この〈世界の終わりの村〉にはたくさんの絵描きが訪れ、あたしは何人もの絵描きと話をしてきたけれど、あたしたちを見分けることが出来たのは彼一人だけだつたわ。その中には有名な絵描きも含まれていたわ。やっぱりあたしはこれを何かの縁だと思ふの。あなたがあたしたちを見分けられたように。

次の話は若代表の話よ。あたしが若代表と初めて話したのはちようど、この〈世界の終わりの村〉の代表になることが決まつたころだつたわ。それまで村がどうなりつつあつたのかは初めの日に話したからわかると思ふけれど、もう一度繰り返すと、あまり村はよい状況じゃなかつたわ。悪いことが続いていた。この村を開拓した人々はその流れを断ち切ろうとしていたのよ。

若代表はあたしの家に訪ねてきたわ。あたしたちはこの村を一番よく知るものとしてあたかも巫女のように扱われていたわ。でも、それは間違えなのよ。あたしはほんの少しだけ長く生きていただけ。まあ、こんなところでそんな話をして意味がないわ。あたしは彼を何度も見たことがあつたわ。だけど、それは遠目からだつた。近くで見た彼はとても聡明な人間に見えたわ。とても知恵があり、人の先頭に立てる人間だつた。そして何より人柄がよかつたわ。決してその知恵を間違つた方向へ使うような人ではなかつた。それが見ただけでわかつたわ。あたしは決して多くの人を見てきたわけではないけれど、後にも先に

も彼ほどよい人間であると思つたのではないわ。

そのときは、あたしたちと彼で紅茶を飲みながら、形式的な挨拶と報告をしたと思うわ。彼の仕草は優雅だった。非の打ち所なんてなかったわ。最初の印象と言えばこれぐらいだったかしら。彼はそれから三日三晩働いたりしながらも、時々あたしの助言をもらうために家に来たわ。彼はそのときに、他愛もない話もしてくれたわ。美味しい料理の作り方。野菜、家畜の育て方。あたしは今までそんなことに興味を持つたことなんてなかったわ。だって、自分で食べないものを作ろうと言う気になれるかしら？ 少なくとも（世界の終わりの村）が出来る以前は、作ろうにも作れない状況ではあったわ。彼はあたしのそんな反論にこう答えたわ。村では誰しもが自分だけのために食料を作っているわけではない。むしろ、全員に均等に行き渡るよう、作った食料をすべて村で買い取り、それから全員へ支給されるんだ。だから、食料を作った彼らは自分たちが作ったぶん、すべてを食べているわけではないんだ。それに、誰かのために何かを出来ることというのは素晴らしいことなんだ。いつか私たちは何も出来ない無力であることを知るときが来る。だから、何か出来るのであれば、やろうという気持ちが大変なんだと。

彼の話はまるで今のあたしを見通して言っているかのようだったわ。今のあたしは無力で、誰かに何かをするという事は出来ない。あたしは結局、野菜も作らなかつたし、家畜も育てなかつたわ。あのころのあたしは再びひとりぼっちに戻ろうとしていた。あたしの家を訪ねてくる人は貧しい旅人と彼だけだったわ。旅人さんはあたしの話し相手になってくれたけれど、すぐにこの村を出発してしまう。彼はとても

忙しい人だったから、あたしから声をかけることなんて出来なかった。もしかすれば、彼は誰かのために
なることで、あたしがひとりぼっちになることを止めようとしていたのかもしれない。

彼は今まであまり交流のなかった近くの町や村、国と交流を持つとうとした。諸国で戦争が起こっている
なんてことは旅人さんから嫌になるほど聞いたことがあったわ。だから、あたしは彼に反対したのよ。結
局、彼の意見に反対したのはこれが最後で、あたしが唯一、彼は判断を間違えた、と思っっているのもこれ
よ。〈世界の終わりの村〉は諸国から独立しているべきなのよ。元々、〈世界の終わり〉にある村には誰も
攻めて来ないわ。一番近い村からでも、五十キロはある。それも冬になればかなり気温が下がる地帯なの
よ。誰が遠くまで遠征して、環境の悪い領地を手に入れようとするかしら？ 確かに〈世界の終わりの村〉
にはたくさん旅人が来るわ。そこで何か商売をすれば儲かるかもしれない。だけど、それは国から見れ
ば、本当に雀の涙程度でしかないの。でも、国、あるいは町、村と交流を持ち、同盟を結んだならば、そ
の国と敵対している国に攻められるかもしれない。敵対するものはすべて根絶やしにしたいでしょう。も
う二度と敵対出来ないぐらいすべてを奪いつくす。それが何よりも争いと言うものだったわ。少なくとも
ほんの数十年前まではね。

あたしは彼に説得を試みたわ。そうね、あたしが覚えているのは三回よ。もしかしたら、四回だったか
もしれないし、五回だったかもしれない。あたしは今言ったようなことを何度も繰り返して言ったわ。だ
けど、彼は説得に応じなかった。この国は大丈夫だ。この町は大丈夫だ。この村は大丈夫だ。どこにも憎

まれるようなことをしていかない。そんなことを彼は言ったわ。あたしから見ると、彼は焦っているようにしか見えなかった。一昨日も話したけれど、彼は、初めて死刑を宣告された家族の末裔ということで、責任を感じていたのかもしれない。村のみんなはどう思っているかは知らなかったけれど、あの時、あたしはもうそんなことでもよいことであつたわ。両親の罪の血が流れていようと、彼はこれ以上ないぐらい素晴らしい人間だつたのだから。

その後は旅人さんも知つての通り。彼はあたしの説得を聞かず、ある国と交流を深め、同盟を結んだ。それとほぼ同時期にその国と隣接していた国が宣戦布告を行つたわ。元々、武力というものを持つていなかったその国はすぐに倒れ、隣接していた国はさらに同盟国にも侵略の手を伸ばしたわ。いつの間にかそれは〈世界の終わりの村〉からそんなに遠くないところまで来てしまった。そして、〈世界の終わりの村〉が攻められる前日、あたしは彼のところを訪ねたわ。

彼は書斎の椅子に深く腰掛けて、ただ天を仰いでいた。あたしの気配に気づくと、あたしのほうを見て、一言、ごめんなさいと言つたわ。よろよろと立ち上がり、こっちに来ると、あたしの目の前で跪いたわ。どうして？ 私はこの村のために頑張り続けていたのに、と彼が言つたわ。彼は毎日、この村から前線に向かった若者の戦死を聞き続け、憔悴しきっていたわ。あたしは彼の頬を思いつき張り張つたわ。人間を叩くのはこれが初めてだった。あたしは彼と視線を合わせるために、跪き、彼の服の襟を掴んで言つたわ。すべてあなたが悪いのだと。あたしはあなたを止めた。だけど、あなたはあたしの説得を聞かなかつた。

あたしの〈世界の終わりの村〉を返してと。あたしの頬からは涙がぼろぼろと流れたわ。振子を巻くだけの人形にも涙を流せるんだなあとぼんやり思ったわ。あたしもつらかったんだと思う。だけど、今になって思うけれど、彼もつらかったのよ。お互いに被害者だった。だけど、お互いに原因に関与していた。彼はもしかすれば、あたしを責めることが出来たかもしれない。だけど、彼はそれをしなかった。彼はやはり素晴らしい人間であつたのよ。

あたしは彼にそれ以上会うことはなかった。〈世界の終わり〉でただ、無力に〈世界の終わりの村〉が焼かれ、廃墟になるすべを見ているしかなかった。毎日のように悲鳴を聞き、血の臭いを嗅ぎ、腐った肉片を見たわ。彼はきつと殺されてしまったのだろうと思うわ。誰が言ったかはもうわからない、風の噂なんだけど、彼は最後の最後まで敵と交渉しようと、何も武器を持たず、軍隊に赴いたらしいわ。もしも、これが本当ならば、彼は最後の最後まで、素晴らしい人間であつたのよ。

さて、これであたしたちを見分けることが出来た二人との物語はほとんど話してしまつたわ。どうだつたかしら？ きつと一昨日話したこの村の歴史よりも面白くなかつたと思うわ。あたしの個人史なんて何も面白いところなんてないのだから。

いや、ただの歴史を聞くより、ずっと面白かつた。そう、とても面白かつた。ただの歴史を聞くよりも、君たちがどう思つて人と接したのかを知ることが、とても面白い。これで、君たちを巡る人物の物語は終わりなのかな？

いいえ。まだひとつだけあるわ。だけど、これは蛇足なの。だから、聞かなくてもよいかもしれない。簡単に言えば、あの絵描きとの話の続きよ。蛇足であるけれど、聞いてみたいかしら、旅人さん。

私はそれに頷く。彼女は紅茶でそっと口を湿らせると、持っていた彼女らを描いた絵の表面を指先でなぞる。まるで細かな絵の具のでこぼこを調べるかのように。私も紅茶で口を湿らせ、姿勢を正す。ふと、私は疑問に思ったことを口にした。

君の持っているその絵のタイトルはなんているのかな？

彼女は目をぱちくりさせながら、再び絵に視線を戻した。彼女はまるで鈴を転がすかのように、あるいはとても大切な言葉を言うかのように、ゆっくりとした口調でそれを言う。

Chloeよ。正式には〈Chloe and World's End〉。絵描きは「の村で描いた絵には必ず〈World's End〉という言葉を入れたわ。あなたが最初に見つけた絵は〈World's End Village〉。そして、最後にもうひとつ、〈World's End Embryo〉というのがあるわ。それは蛇足の話をするときに詳しく話すわ。蛇足の話は絵描き「の」の〈World's End Embryo〉を巡る物語よ。

Chloeとは君たちのことを指しているのかい？ 絵描きは君たちをChloeと名づけたのかい？

確かにChloeには名前の意味もあるかもしれないけれど、絵描きさんはたぶん、牧場の乙女という意味でChloeとしたんだと思うわ。だって彼はあたしたちを一度もChloeと呼んだことはないもの。絵描きさんから見ただけあたしたちがまるで牧場の乙女のように見えたから、Chloe なんじゃないのかしら。あたしも

よくわからないわ。彼は自分の絵については深く話そうとしない人だったから。それよりも、最後のお話。蛇足の話をしようと思うわ。

ある国の虐殺が終わった後、彼らは最後に村を焼き払い、帰って行ったわ。その火はすぐに木造のほとんどを燃やしつくし、鎮火したわ。ほとんど、草木は燃えてしまい、再び〈世界の終わり〉は白と黒の世界に戻っていったわ。それは本当にゆっくり進行していったの。それは何かを忘れさせていくように、ゆっくりだったわ。あたしたちも次第に〈世界の終わりの村〉のことを考えないようになったわ。十年間、誰とも〈世界の終わりの村〉について話さなかったわ。あたしたちは旅人さんが訪れるたびに〈世界の終わりの村〉について話していたの。その旅人さんが来なくなったら、あたしたちは誰に〈世界の終わりの村〉について話せばいいのかしら？

でも、旅人さんはやってきたの。ちょうど十年よ。あたしたちはそれに運命にも似たものを感じたし、もしかしたら本当にそんなものがあつたのかも知れない。

旅人さんは弱っていたわ。あたしたちが彼を見つけることが出来たのは奇跡的なことだったかもしれない。彼は〈世界の終わりの村〉の狭い路地で倒れていたわ。あたしたちがその日、たまたま〈世界の終わりの村〉を散歩していなければ、その旅人さんは死んでいたかもしれない。

あたしたちは彼を家まで運んだわ。大人の男の人だったからあたしたちは苦労したわ。だから、彼が絵描きさんだったということに気づいたのは家に運んだ後だったわ。顔が薄汚れてて、顔つきもだいぶ変わ

っていたけれど、ところどころあの絵描きさんに似たところがあつたの。

絵描きさんが目を覚ましたのは、次の日の朝だったわ。あたしたちは彼にあなたは昔訪れたことのある絵描きさんかしら？ と尋ねたわ。彼は覚えてくれたんだと言つたわ。あたしたちも記憶が曖昧だったの。

だけど、かすかにあたしたちのなかに彼の記憶は残っていたわ。彼がまず最初に行ったのは、食事を取ることであり、疲れを癒すことだったわ。だけど、あたしの家には食料がほとんどなかったのよ。彼が持っていた食料も僅かだったわ。彼は弱っていたし、十分な栄養を与えなければ死んでしまうとあたしたちは昔からの経験で知っていたわ。だけど、あたしたちはどうすることも出来なかったのよ。もう〈世界の終わりの村〉からは食料は生まれなし、白と黒の世界になりかけた〈世界の終わり〉では、長い年月をかけるないと植物は育たないわ。何よりあたしたちはそのすべを知らないのよ。

結局、彼が目を覚ましたとき、あたしたちがまずしたことは、ここには食料がないことを打ち明けることよ。だけど、それを聞いて絵描きさんは絶望したり、あたしたちを恨むようなことはしなかったわ。ただ、いいんだと言つたわ。あたしたちは、どうして？ と尋ねたわ。彼は、私はもうそろそろ死ぬ頃合なんだ。ただ最後に〈世界の終わり〉で死にたかつただけなんだと言つたわ。それに付け足して、このままならあと一週間も生きることが出来ないだろう。その間、君たちの話を聞きたいと。

あたしたちは自分の無力さを呪うべきであつたのよ。あたしたちは彼の死を変更することは出来ない。一週間あれば、隣の村まで言つて食料を買つてこれたかもしれない。だけど、あたしたちにはそれが出来

なかった。あたしたちの役割は〈世界の終わり〉で振子を巻き続けることだったのよ。それを怠れば、この〈世界〉はきつと端から崩れていくわ。それは誰も望んでいなかったわ。この世界で一番それを望んでいなかったのは、あたしたちだったわ。だから、あたしたちは彼を見殺しにすることを呪うべきだったのよ。だけど、彼はあたしたちの話を聞きたいと言ったわ。まるで、無力なあたしたちに来ることがあると言っているかのごとく。

あたしたちは覚えていることすべてを彼に語ったわ。あたしたちが生まれ、すぐにあたしたちの母たちが死に、ただひとつ教えられた〈世界の終わり〉に振子を巻き続けることを何百年も繰り返してきたこと。〈世界の終わりの村〉のこと。絵描きさんのこと。若代表のこと。そして、〈世界の終わりの村〉の虐殺のこと。あたしたちがそれに無力であったこと。あたしたちはそれらを〈世界の終わり〉に振子を巻きに行くとき以外、彼の傍らでずっと話し続けたわ。彼はずっと話に付き合ってくれたわ。だけど、あたしたちの語れる話なんていうのはごく僅かであったの。それらは三日で語り終えてしまった。だけど、その三日後、本来ならば、ありえないことがおこったのよ。

旅人さん、あなたも見たでしょう。あの〈世界の終わり〉にたどり着くまでの霧を。あたしたちは何百年と見てきているけれど、あれが晴れたのは一回だけ、それも三日間だけだったわ。この時だけだったのよ。あたしたちの家から〈世界の終わり〉ははっきり見ええたわ。何万と何億と重なりあう歯車、黒い塊、鉄の噛み合う音。あたしたちはそれを絵描きさんに見せたわ。絵描きさんもそれに驚いていたわ。そうで

しようね。地平線の彼方まで続く黒い塊を見たのは、あたしたちも初めてだった。それを見た、彼は最後の力を振り絞って、それをキャンバスに描こうとしたわ。物置の中から、まだ使われていないキャンバスと画材を探し出して、彼は玄関の目の前に椅子を置き、そこで三日三晩、それを描き続けたわ。ちょうどそのころは冬だったから、外はとても冷えたわ。彼は雪が降りそうだと言っただけで、〈世界の終わり〉の冬はただただ冷たい風が吹き続けるだけなの。空から白い粉が落ちてくるような幻想的なものではなく、まさに終末的なイメージであったわ。凍えるような寒さの中、絵を描くことは確実に彼の死期を近づけていたと思うけれど、あの絵が完成するまで彼は死なないとも思ったわ。それほど彼は絵を描くことに熱中していたの。あたしたちはその絵が完成することを恐れたわ。もしも、完成してしまえば彼はそのまま死んでしまいそうだったの。永遠に未完成であればいいと考えたことは何度もあるわ。だけど、描き始めてから三日目にその絵は完成してしまった。タイトルに〈World's End Embryo〉。隣に〈二人の優しい少女へ。生涯で最高の風景を〉と書かれていたわ。彼はあたしたちの予想通り、絵を描き終わった後、体調を崩したわ。そのまま彼の容態は悪化の一途を辿り、絵が完成してから二日目。彼が〈世界の終わりの村〉に来て一週間後、死亡したわ。彼との最後の会話は今でもはっきり覚えている。あたしたちは自分たちの無力について、絵描きさんのために何もしてやることが出来なかった。ただ死期を見届けることしか出来なかった。あたしたちはなすすべが何もなかったと。

だけど、彼はこう答えたわ。それを恥じることはない、それを悔やむことはない。自分を呪うでもなく、

恨むでもなく、祈るんだと。確かに私たちは時に世界には無力かもしれない。絶望的な立場におかれているかもしれない。だけど、私たちは何も出来ないわけではない。祈るんだ。ただ祈るんだ。誰かのために。それが無力な私たちに出来る最後の手段だと。

さて、これで蛇足の話は終わり。結局、あたしたちはすべてに負けてしまったの。いつだって世界は優位であたしたちは無力で。何もすることが出来なかった。

私も君たちと一緒にだよ。私は君たちに何も出来なかった。その絵描きのように絵を残せたわけではないし、若代表のように素晴らしい人間でもない。

だが、彼女らは首を横に振った。彼女らの一人が立ち上がり、持っていた絵を隣にいた少女に手渡す。彼女はゆっくりと私の方に歩いてくる。彼女は私の目の前に立つと、そのワンピースの裾を自分の肩のあたりまでたくしあげる。目の前には彼女の胸と、大きな穴があった。中ではせわしなく小さな歯車が動き続けている。

旅人さんは気づかなかったかもしれないけれど、あたしたちの中では昨日の音楽が響き続けているのよ。さあ、耳を当ててみて。

私は言われたとおり、彼女の穴に耳を当てた。そこからは歯車の音と共に、ほんの僅かだが、昨日私が弾いた音楽が流れていた。それは文字通り彼女の中で響き続けていると言っているのだろう。流れるようなメロディーと即興の音の塊が、まるでうねるかのように響き続けている。私は彼女の身体を両腕で引き

寄せ、その音をさらによく聞こうとした。そのとき、彼女は涙を流しながら、震える声で言った。

ねえ、旅人さん。あなたは何も出来なかったわけじゃない。あたしたちにちゃんと音楽を残していったのよ。ねえ、旅人さん。あなたは本当に旅人さんなの？ 本当は絵描きさんや若代表ではないの？ ねえ、お願い、あたしたちに教えて。どうしてあなたも、絵描きさんも若代表もみんな同じ顔をしていたの？ あなたもあたしたちと同じように人形なのかしら？ それともこれはみんなあたしたちが見ている幻想なのかしら？ 旅人さんが決して〈世界の終わりの村〉以外の話をしようとしなないことも、絵描きさんが話した嘘っぽい国の話も、若代表が同盟を結んだ国も、〈世界の終わりの村〉を攻めた国も、本当は〈世界の終わり〉以外のものなんて、この〈世界〉に存在しなくて、この〈世界〉はもともと何もなくて、〈世界の終わりの村〉も、あなたも本当はいないんじゃないの？ ねえ、旅人さん。どうなのかしら？ 本当はこの〈世界〉にはあたしたちだけしかないんじゃないのかしら？

たとえ、そうだとしても、君たちは何も出来ない。私にも何も出来ない。君たちはただ祈ることしか出来ないんだ。君たち以外、本当は誰もいないかもしれない。だけど、誰かに向かって祈り続けるんだ。ただ、その誰かが上手くいくように、祈り続けるんだ。それが無力な私たちに出来る最後の抵抗だよ。どうしようもないほどの力を持つ〈世界〉に対する、ささやかな反抗だ。ちよつと強い風が吹けば、消し飛ばされそうになるけれども、決して消えない力、それが祈りだ。だってそうだろう？ 君たちはいつだって〈世界の終わり〉に振子を巻いているじゃないか。それが祈りなんだ。祈り続けている限り、君たちは一

人じゃない。誰かと繋がっているんだ。孤独に打ちひしがれそうなとき、祈るんだ。誰かに向かつて。きっと絵描きさんもそう言いたかったんだと思う。

彼女は私の頭を抱いて、泣きじやくった。彼女らは何百年の間、孤独で、誰かと関わっていられたのはほんの一瞬で、誰かと繋がっていたのだから。彼女らは〈世界〉に対して、敗北し続け、これからは敗北し続けるであろうことを知っている。そして、死ぬまで敗北し続けるのだ。絵描きも、彼女らに祈ることを教えたのはほんの気休め程度のことであつたのだから。私もそうだ。実際、繋がっているわけでもないし、この〈世界〉に勝つことは、絶対にない。

だけど、祈ることに必要なのは、その行為について盲目的に信じることなんだ。私と君たちは繋がっている。それを信じるだけでよい。ただ、祈れとはそういうことなんだ。

彼女は長い間、泣いていた。まるで今まで耐えてきたものを吐き出すかのように。彼女らには泣く資格があつたのに、それに気丈に耐えてきたのだ。孤独に心を押しつぶされそうになりながらも、凜と生きてきたのだ。やがて、嗚咽が小さくなり、彼女は私の頭をそっと話した。彼女の目は泣き腫らしたのだから、真つ赤になつていたが、すがすがしい笑みに満ちていた。

ありがとう。旅人さん。本当にありがとう。

彼女はそう言うと、少女のもとへと行き、小さな声で耳打ちした。それが振子を巻くことだというのはすぐにわかつた。彼女らは〈世界の終わり〉に向かう準備を始める。私もここを出る準備を始めた。特に

持つていくものはなかった。手風琴を持ち出そうと思ひ、倉庫を空けたが、手風琴はなく、そこには真つ白な砂があつた。もしかすると手風琴は一晚のうちに砂となつてしまつたのかもしれない。

荷物を持つて、居間に行くと、ちようど彼女らも準備が出来たところであつた。私たちは一緒に家を出る。家の前で私は彼女らにお礼をした。彼女らは私を見ながら、口を開く。

いいえ、あたしたちも久しぶりの旅人さんで、とても嬉しかつたわ。

私たちはお互いに逆の方向に向かつて歩き出した。私は〈世界の終わりの村〉のほうへ、彼女たちは〈世界の終わり〉のほうへ。丘を降りる途中、私は一度だけ振り返つた。空からは、灰色の雲の隙間から、〈世界の終わり〉に向かつて、まるで祈りを捧げる少女たちを祝福するかのように光が伸びている。〈世界の終わり〉は太陽の光によつて照らされていた。霧は晴れ、地平線の彼方に延々と伸びる黒い塊が見える。小さな音で、金属のぶつかる音、歯車がかみ合う音、〈世界〉の胎動する音と共に、小さな粒のような黒い影が〈世界の終わり〉にあつた。彼女らの今日も世界が美しくありますように、そして、すべての人が無事で一日を過ごすことが出来ますようにという声が聞こえてきた気がした。

彼女らは、いつか朽ち果てるまで祈り続けるだろう。

私は再び、〈世界の終わりの村〉に視線を戻すと、指先から少しずつ砂になつてゆく感覚を感じながら、大地に膝をつき、天を仰ぐ。体はすでに動かなかつた。私が最後に見た景色は雲の切れ間から、降り注ぐ光だつた。私はそれを掴もうとした。それが彼女らの祈りだと思つたからだ。

私が腕を動かそうとした瞬間、体は本来の砂へと帰った。

了